

編集後記

編集長(ダン シロウ)

通巻第10号が出た。一応、対人援助学会のニュースレター拡大版の位置づけである。執筆者には学会員になってもらって書いていただいている。

しかし実態は、まったく勝手に編集をしている。ほとんど学会の関与はない。もっとも、編集長をしている私が、現在は理事長だから、全然関係がないわけではない。書いて欲しい人に打診したり、執筆者からの提案を受けて、書いて貰ったりしてここまで来た。

こんな形で刊行物が作れるのか？作っても良いのか！と感心というか、あきれている人もいるに違いない。

世の中のたくさんのねばならないを、けっして不要なことだとは思わない。勝手気ままが一番良いなどと、自己中で、特権的なことを主張したいわけではない。

世間のしがらみには、やるせないものや、どうしようもないものが、たくさん含まれている。それも込みで、維持形成されているものが沢山ある事を十分承知している。綺麗さっぱり片付けることが、良きものを作る道筋だとも思わない。

だから静かに、積み重なってゆくものを、今後も続けたいと思う。いつまでというような時間の区切りはない。続けられる限り。そして仮にその号が最終号になったとしても、その中断に悔いがないように、その時を力投しておきたいと思う。

やりたいこと、出来たらいいと思っていたことがドンドン実現している。これから、自分に出来ることをやり続けていきたいと思う65歳の秋だ。

編集員(チバ アキオ)

「ヘルタースケルター」を観た。原作漫画を持っていたので、どういう作品になるか楽しみだったからだ。沢尻エリカがどうでもよかったわけではないけど。

観てみると、原作には忠実な方な部類の映画だった。主人公「りりこ」の描写でどこにもいる女の子というところが原作よりは薄く、その分芸能人としての成功という色付け(ふんだんに「赤」も使ってね、蜷川さんですから)が濃かった。ストーリーや登場人物ではなく、演出のことをより思い出す鑑賞後感が自分でもおもしろい。原作漫画の「りりこ」。ああいう人なあ、感じとしては遠くないなあ。初期の田口ランディが取り上げてきたところ。「戦前の少年犯罪」を読んでも、「忘れられた日本人」を読んでも、男女問わず人にはそういう側面があるし、それでいいんだと思う。

同じネタを漫画と映画という表現。このマガジンは、「マガジン」という表現。他では論文という表現でもたくさん描かれてきた世界がテーマになっています。同じものでも、表現方法が異なると今までになかったところも表現できる。伝えることができる。祝10号！これでいいんだと思う。

ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

印刷版対人援助学マガジン(1号~9号)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻10号

第三巻 第二号

2012年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第11号は2012年12月15日
発刊の予定です。

原稿締め切りは11月25日！

新規連載者も募っています。

未執筆分野からの、積極的なエ
ントリーをお待ちします。

執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

映画「ブルー スカイ」は1994年に公開された、ちょっと変わった映画だ。トニー・リチャードソン監督は「蜜の味」「長距離ランナーの孤独」で1960年代に登場し、「ブルー スカイ」が遺作になった。

このイラストは主人公の妻（カレン・ブラック）が、トップレスで海岸を歩いているシーンからのイメージだ。この作品でアカデミー主演女優賞を取ったのだが、知らない人も多い作品だと思う。

配給会社が倒産して、公開まで4年もかかったり、監督が亡くなったり、ストーリーもすっきりしないところのある変な話だ。

情緒不安定な妻を愛し、彼女の起こす様々なことに巻き込まれてゆく軍人の夫（トミー・リー・ジョーンズ）。

この妻のように、自分の今居る所を、そこが本当に自分の居場所だと思えない女性の物語はいくつも見た。

人はしばしば、本当の自分はこんなものではないとか、ここには自分が駄目になってしまうなどと言う。

私の高校時代、そんな風に語る女友達に、「今ここにいるお前も、お前だと思う。どこか他にいる自分が、本当の自分だなんてのは、そう思いたい自分がここに居るといだけのことだろう」等と、身も蓋もないことを言ってしまったことがある。そういう事には、妙に意地悪く敏感だった。自分に対して、そんなことはまったく思っていなかったから投影ではないと思う。

そしてこの作品でも登場する『女優になりたい女性』というキーワードとは、あちこちでお目にかかった。女の人のことを、ある意味、みんなそうだと思っているところが私にはある。

2012/09/15 団士郎